はじめに

僕たちのタロットの旅が「愚者」と「奇術師」から
スタートするのは、実に象徴的だ。
この２人は期せずして僕たちにとっての「タロット」
そのもののイメージを映し出しているように思えるからだ。
愚者の「愚かさ」と奇術師の「賢さ」はいつの世にも
人の心をとらえて離さない元型だ。
だが、「愚かさ」とは、「賢さ」とは何だろうか。
ソクラテスは「無知の知」を、仏典は「無分別の智」を説く。
幼子の愚かさは何物にもとらわれない純粋な精神かもしれず、
大人の賢さは単なる小賢しさでもあるかもしれない。
愚と賢は変幻自在に入れ替わり、にわかに判別できない。
タロットもまさにそうだ。
素朴な絵札に伝統的な寓意が秘められ、
迷信じみた占い遊びがときに心の深みを照らし出す。
だが、そこに輪郭のはっきりした「真実」を求めようとするなら
タロットの占いは、愚かしい迷妄となる。
これから始まるタロットの旅は
愚者と奇術師が交互に導く終わりなき道行きだ。
いっときこの俗世のしがらみと分別を捨て、この旅を楽しもう。

鏡 リュウジ

ヤン・ファン・ベールス 《赤い道化師》 19世紀後半

ウェイト＝スミス版〈愚者〉
Waite–Smith Tarot
1910 イギリス／ロンドン 夢然堂蔵

0 愚者

現代の通例では「愚者」はタロットのスタートを飾る。現実世界において古くから社会的に低い地位にあり、ネガティヴなイメージを持つ一方、その自由なふるまいや純粋さに存在価値が見出されてきたのも事実。一体、「愚者」とは何者なのだろう？

0

愚者 / *The fool*

社会通念や分別に とらわれない純粋な存在

僕たちのタロットの旅は「愚者」から始まる。だが、これは現代のタロットの通例に従ったものにすぎない。歴史的には「愚者」は、他の切札（絵札）とはややステイタスを異にしていて、同列に扱うことはできないものだった。22枚の「大アルカナ」の中で唯一、番号が与えられていなかったのだ。元来タロットはゲーム用のカードであり、その遊戯において切札には「強さ」のランクが定められていた。今では「愚者」は「大アルカナ」として他の札と同列に扱われているが、もともとはこの切札に属しておらず、より自由な扱いを受けていたのだ。

この無番号、無所属という状態そのものが「愚者」のイメージを端的に表しているのではないだろうか。

時代や地域によってこの「愚者」の顔はさまざまだ。ぼろをまとい、痴呆のしるしである羽を頭につけた「愚者」、宮廷に出入りしつつ日常の秩序を反転させる「道化」――そうあのシェイクスピアが愛した存在だ――そして精神を病んだ者、家なき物乞いといった姿をとってきた。いずれも通常の社会通念から見れば否定的な評価しか与えられない存在だろう。

しかし近代に入り、とりわけ19世紀末以降、「愚者」は大いなる変容を遂げる。この「愚かさ」は、人間の小さな分別智ではとらえきれない純粋な存在を示すものとしてイメージされるようになったのだ。みすぼらしい老人の姿からついには神的な子どもまで――。考えてみれば、真実は世間の常識という小賢しさを脱がなければ見えてこない。愚かさと真の英智、童と翁は容易に入れ替わる。タロットの象徴の奥深さは、このように見かけの二元性を軽々と超えるところにある。

「愚者」の不敵な笑みは、僕たちの見かけの賢さのペルソナを見透かしているのだ。

ヴィスコンティ・スフォルザ版
〈愚者〉
Visconti–Sforza Tarot
1480–1500頃　イタリア／ミラノ
モルガン・ライブラリー・アンド・ミュージアム蔵（ニューヨーク）

現存する最古の札のひとつ。ぼろをまとい、頭に愚かさの象徴である羽をつける。喉の腫れは甲状腺腫瘍を示すものだろうか。睾丸にも見えるこの描写は他のパックにも見ることができる滑稽で性的な描写の暗喩かもしれない。次頁のジョットの「愚鈍」の寓意と比較してみてほしい。

マルセイユ版タロットの世界

文・夢然堂

「マルセイユ版」とは簡単に言うと、17世紀頃のフランスで完成を見た木版タロットと、その様式を採用した諸パックの総称である。その切札全22枚の中で「愚者」は唯一、通し番号を与えられないという特殊な地位にある。その原語名（fou あるいは mat）は文字通り「頭のおかしな者」の意なのであるが、併せて「熱中した、興奮に我を忘れた」といった意味も持っている。実は長らく謎であった「タロット」という名称の語源にも、こうした意味があったらしいという説が最近出ている。

タロット本来の用途はギャンブル的ゲームであり、手にした者たちにとってはこの愚者札こそが、自己投影の対象であったかもしれない。西洋の美徳概念の基本たる四元徳のうち「深慮」だけが切札から姿を消していることも踏まえれば、そこに籠められた皮肉を勘ぐりたくなる。聖書の詩篇にある、「神の存在を信じぬ者」としての罰当たりな愚者も想起される。しかしまた同時に、聖フランチェスコのような「神の道化」となる可能性を秘めた、無垢で一種崇高な存在という捉え方も可能であろう。

掲載の図版４種においては、コンヴェル版が最もスタンダードな「マルセイユ版」のデザインであり、ミュラー版もそれに準ずる。足元の犬らしき動物は「愚者」の連れ合いとも見えるし、よそ者の彼を追い立てる様子とも取れる。一方、ブザンソン版では猫が脚に齧（かじ）りついている。ヴィアッソーネのピエモンテ版では下半身が描かれず動物の姿もないが、代わりに彼を誘うように蝶が眼前を飛んでいる。ピエモンテ版に至って初めて現れた特徴である。

ルヴァンのニコラ・コンヴェル版〈愚者〉

Tarot of Marseilles by Nicolas Conver
1860年代頃　フランス／マルセイユ　夢然堂蔵

1889年、パピュスの著書『漂泊民のタロット』で図版に使用され、そのお墨付きを得て以降、「マルセイユのタロット」の代名詞として最も権威ある地位を与えられてきたのが「ニコラ・コンヴェル版」である。掲載図版はおそらく1860年代あたりの製品で、コンヴェルの使用していた版木を受け継いでいた後継業者ルヴァンによるものと思われる。ステンシル（型紙）で彩色がなされており、後のバージョン（カモワン）より色数が多い。

カモワンのニコラ・コンヴェル版〈愚者〉

Tarot of Marseilles by Nicolas Conver
19世紀末　フランス／マルセイユ　夢然堂蔵

ルヴァン家の事業を承継したカモワン家は1880年代に製造工程の合理化を図り、コンヴェル版の彩色にも変更を加え色数を減らしたバージョンを作成した。マルセイユの地で製造された本当の意味での「マルセイユのタロット」としては最後のものとされており、グリモー社製ではこのパックの彩色パターンが参考にされている。掲載図版は金貨のエース札に見られる税印から1890年以降の製品であることがわかる。

ヤン・マテイコ
《スタンチク》
1862　油彩／カンヴァス　88×120㎝
ワルシャワ国立美術館蔵

近現代絵画に見る
愚者

文・千田歌秋

——自由な言動に垣間見られる
道化師たちの生きざま

古くは愚行の寓意として、現在では自由な魂の象徴として描かれる愚者。それは、愚かな役を演じて人々から嘲笑されることで、王の前ですら自由な言動が許された、道化師の姿と重なる。

16世紀ポーランドの宮廷道化師で、その発言が国政をも左右するほどの影響力を持ったスタンチクは、自由な精神を持つ野心的な道化師の典型である。マテイコは、祖国の危機を知って思い悩む彼を、英雄のような姿で活写した。

一方ドランは、エンターティナーとしての道化たちの姿をユーモラスに描いた。弦のない楽器を弾いて踊る２人に哀愁が漂うのは、宮廷に守られることのない職業道化師の宿命だろうか。

アンドレ・ドラン
《アルルカンとピエロ》
1924頃　油彩／カンヴァス　175×198㎝
オランジュリー美術館蔵（パリ）

愚者からのメッセージ

✸ 自分を解放し、ゼロにリセット ✸

ひとり、野をひょうひょうと進むこの愚者は
社会の秩序に容易に収まりきらない存在を示している。
このカードを引いたとき、あなたのことを
「愚か」という人もいるだろう。
もしかしたらあなた自身も自分を「愚か」と
なじりたくなるかもしれない。
しかし、逆を言えばそれはあなたが
何ものからも自由でいるということでもある。
既成の枠組みにお利口に収まっていられるほど、
人間の魂は不自由なものではないのかもしれない。
人はみな裸で何もない状態で生まれてきた。
今はこれまで着込んでしまったいろいろなものを脱ぎ捨て
ゼロにリセットするときなのだろう。
リスクはあるものの、無限の可能性が
あなたの前に広がっている。

Love／恋愛

常識や世間体にこだわらない恋や愛があなたの前に。
あるいは実年齢、精神年齢が「若い」存在が
あなたのハートを開いてくれるという暗示もある。
自分を決めつけなければあの最初のときめきを
もう一度感じることもできそうだ。
ただし、そこにリスクがあるのもお忘れなく。

Work／仕事

まだ仕事は始まったばかり。あれこれと夢想は
広がっていくけれど、それを「絵に描いた餅」
「若気の至り」で終わらせるのか、
実際的な形にしていくかはこれからのあなた次第。
ただ、今は小さな現実にばかり縛られないで
夢を広げていくことだ。まずは大きく設計し、後で現実化を。

Relationship／対人関係

常識という名の偏見で相手を見てはならない。
人はそれぞれの価値観がある。育ってきた環境も違うのだ。
相手を受け入れるにはまずあなたが色眼鏡を捨てて
「幼子」のような愚者に戻る必要がある。
あるいは最初の印象で驚かされた「非常識」な相手が
キーパーソンだということも大いにあり得るのだ。

The Magician

ドッソ・ドッシ《奇術師》（部分）
16世紀前半　プーシキン美術館蔵（モスクワ）

ウェイト＝スミス版〈魔術師〉
Waite–Smith Tarot
1910　イギリス／ロンドン　夢然堂蔵

1 奇術師

The Magician

机上に小道具を広げて不思議な技を披露し、人々を魅了する「奇術師」。近代に入り、彼は高度な知と技術によって宇宙の真理に近づこうとする「魔術師」と呼びならわされる。タロットにおいて「奇術師／魔術師」はどんな奇跡を見せてくれるだろうか。

ミンキアーテ版
〈奇術師〉
Minchiate Tarot
1860–90頃　イタリア／フィレンツェ
フランス国立図書館蔵（パリ）

「ミンキアーテ・タロット」とはルネサンス時代にフィレンツェで誕生した97枚1組のタロットのバリエーション。女性に見誤りそうな「奇術師」が若い2人の観客を驚かせ、夢中にさせている。

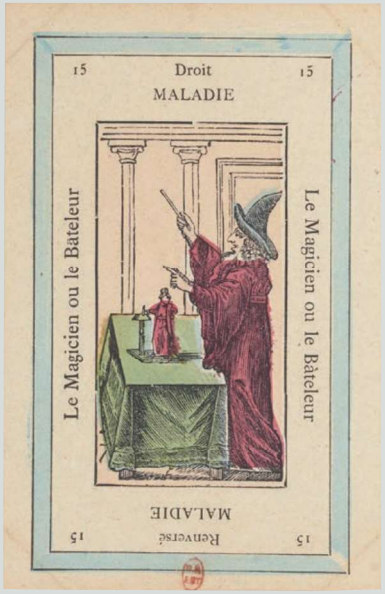
名画に見る〈奇術師〉

ヒエロニムス・ボスの工房または模写
《奇術師》
1496–1520頃
油彩／板　53×65cm
サン＝ジェルマン＝アン＝レー
市立博物館蔵

鮮やかなトリックを披露する奇術師と、それに目を奪われる観客たち。腰をかがめる左手前の人物は熱中するあまり、財布がすられていることに気づかない。奇術師の腰の籠に見えるフクロウは、彼の知性を表す。

歴史上、初めて占い専用に制作されたのがこの「エテイヤ版」。フランスのオカルト主義者エテイヤによるパックで、数種のバージョンが存在する。その構成、順序は通常のタロットとは全く異なり見る者を驚かせる。しかしその色合いや構図は大変美しい。「奇術師」に相当するとされる札は15番目に置かれており、「病気」というタイトルが与えられている。現在流通している占いマニュアルによると心身の病を象徴するという。右図の札では、机の上に通常の手品や魔術の小道具ではなく人形が置かれているのが特徴的だ。もしかするとこれは神像に魂を吹き込み動かすという「神働術」を想起させようとしたものかもしれないと想像する。

グラン・エテイヤ
（タロット・エジプシャン）〈病気〉
Grand Etteilla or Tarot Égyptien
1875–99頃　フランス／パリ　鏡リュウジ蔵



グラン・エテイヤ
（タロット・エジプシャン）
〈病気〉
Grand Etteilla or Tarot Égyptien
1850–90頃　フランス／パリ
フランス国立図書館蔵（パリ）

ウェイト＝スミス版
〈魔術師〉
Waite–Smith Tarot
1910　イギリス／ロンドン　夢然堂蔵

20世紀を代表するオカルト的タロットのひとつ。製作者のウェイトによれば、この「魔術師」は頭上に聖霊、生命の印（無限大の記号＝∞）を抱き、その顔にはアポロの表情が宿っている。帯は自分の尾を食べる蛇、すなわち無限の象徴であり、机の上には四大元素を象徴する道具が置かれる（剣＝風、杯＝水、金貨＝土、棒＝火）。天と地を指すそのポーズは秘儀参入者であることを示すものだとウェイトは語る。